

解 答

問1 ウ 問2 太陽のさんさんと照りつける様子

問3 A ア 問4 イ エ 問5 ウ ア 問6 ウ ア

問7 A 見える B 見えない C 再会 D 永遠

問8 以心伝心

問9 今日みたいな空の色

問10 わたし 問11 エ

問12 ア・エ・オ

問1 a 「約束」[事] b 改正 c 半減

問2 A 「きそ」[い] 問3 オ 問4 オ

問5 不思議な

問6 ウ 問7 エ 問8 イ

問9 勝つために一所懸命プレーしていると、カッとなることが当たり前だが、カッとなつても暴力を振るわず、「ルール」が何故必要かという原則を理解し、その原則を守る覚悟を持つて、ルールに従い正々堂々とプレーするという難しいことができるから。

問10 自由意思

問11 楽しむ

問12 ア B イ A ウ B エ B オ A

解説

〔一〕出典は、覚和歌子「ドモ アリガト」（『ゼロになるからだ』より）。

問1 「おられません」は、「おる」+「られる」+「ません」に分けられます。「おる」は「いる」の古風な言い方。「ミロクボサツ」や「セイボマリア」が「いる」ということを敬って尊敬の助動詞「られる」を使い「おられ（る）」としたのです。一語の尊敬動詞では「いらっしゃる」。したがって、丁寧な打ち消し語を伴い「いらっしゃいません」となります。

問2 「おてんとサマ」の「気前のいい」様子のことで、「擬人法」が使われています。「おてんとサマ」（お天道様）とは、太陽を敬い親しんで呼ぶ言葉ですから、「太陽」のこと。「金や物を惜しみなく差し出すこと」が「気前のいい」という意味ですから、「太陽」にとつては、「さんさんと照りつけること」がそれになります。直後の「はだかで暮らす」という表現からも、南国の熱い日射しが想像されるでしょう。

問3 A 「ミロクボサツ（弥勒菩薩）」も「セイボマリア（聖母マリア）」も、信仰の対象、すなわち、心の支えとなるものと考えられます。そうしたものが「おられません」という点、また、村になんにもなくとも平気である様子から考えてみましょう。B 「あるのは、あの気前のいいおてんとサマと／はだかで暮らす わたしたちばかり」という表現から、「太陽」は「自然」、「はだか」は「自分を飾ることのない」ということを表していると解釈することができます。

問4 傍線直後の3行にその理由が示されています。すなわち、「魚も鳥も木も花も／持ち主がいないので／数えるテーマがいらない」からです。「魚・鳥・木・花」は「自然」、「持ち主がいない」は「特定の誰かのものではない」、「数えるテーマがいらない」は「数で管理する必要がない」というように対応させることができます。

問5 直後の「だから退屈しないように／お芝居や音楽が、おおはやりです」に着目して考えます。どうしてこうなのかというと、いつもいつも村の人はドラマチックな（劇を見るような）感動や緊張を感じさせる（事件をおこさないから、つまり、毎日毎日に変化がなく、静かでのどかであることを当たり前に感じているからなのでしょう）。

問6 他からは、「ゲイジュソスイジュンが高い」と言われるが、そのことは「わたしたちの言葉」にはなおせない、つまり、わたしたちの言葉では表せないと言っているのです。「高い」かどうかは、比べるものがあつて初めて言えること。「高い」というのを言葉になおせないということは、村の人々には他と比較して判断することができないからです。

問7 直前の3行に着目して考えましょう。「死んだ人」が「見えない」のは寂しいけれど、「見えないだけ」という言葉から、生死の違いは、相手が「見える（A）」か「見えない（B）」かの違いであることがわかります。「そのう

ち また会える」の「そのうち」とは「死後の世界」のことであり、「また会える」とは、「再会（C）」できるということ。「死後の世界」で「再会」できるということは、「死」は、無限に続く別れ、つまり「永遠（D）」の別れではないということになります。

問 8 「言葉に頼らずに互いに理解し合っている」ということは「言葉に頼らなくても互いに気持ちが通じ合うこと」に他なりません。そのことを四字熟語では「以心伝心」といいます。

問 9 直後の一行から、「シャシン」とは、「あなた」がそれを見ることによって、「わたし」のことを思い出すことのできるものと考えることができます。ですから、「わたし」が見ることによって、「あなた」のことを思い出すことのできるものが、「同じ働きを担っているもの」ということになります。では、何によってあなたのことを思い出せるのでしょうか？ それは、「今日みたいな空の色」を目にすることによってです。

問 10 誰が、思い出せるのか？ と、問い合わせながら前にもどって「誰」に当たる言葉をさがします。

問 11 この詩では、「ドモ アリガト」を初めとして、「ミロクボサツ」・「セイボマリア」・「ゲイジュツノスイジュン」・「シャシン」など自分たちの世界とは無縁のものはカタカナで表記されています。ですから、「ドモ アリガト」（「どうも ありがとうございます」ではない）という表現を用いているということは、村人たちは、相手の世界で使う言いか方、すなわち、「相手に合わせた表現」で伝えようとしているのだと考えることができます。カ：「多くの村人の日常生活」は描かれていません。また、「村の生き生きとした様子」も読みなれてうれしい」ということは、第六連から読み取れます。イ：「会えたことを喜んでくれて、いる」とわかったので」→×。

問 12 ア：第二・三・四・五連から読み取れます。エ：「ドモ アリガト」とか「ゲイジュツノスイジュン」など、本来ならばカタカナ表記はしないのに、あえてしているのは効果をねらっているからです。オ：「ああ それで、ゲイジュツノスイジュンが高いのですねって」「死んだ人に会えなくなつて寂しくないのかつて」、「最後に言いたいことでスか」などの言い回しは、相手が言つたことを村人が反復して述べることで、村人一人の語りの表現になつています。カ：「多くの村人の日常生活」は描かれていません。また、「村の生き生きとした様子」も読みません。→×。

問 13 出典は、広瀬一郎「スポーツマンシップとは？」（高峰修編『スポーツ教養入門』より）。

問 14 傍線直後の「では、まず『ルール』について考えてみましょう。『ルール』はなぜあるのでしょうか？」の部分に着目すると、これから「ルール」が必要な理由を説明する方向へ話が進んでいくことがわかります。そうした話に導入するための「きっかけ」として、「スポーツとは『ルール』のこと」という話を持ち出したと考えられます。

問 15 「どこまでも同じ状態である様子」を表します。

問 16 ここでの「妙」とは、「普通とは違つていて、変なこと。不思議なこと」という意味になります。

問 17 直後の『得点するのを面倒くさくする』以外に存在する理由はない」の部分に着目して考えてみましょう。「理由」ではないことは、「得点するのを面倒くさくするだけの理由」しかない、つまり、「誰にでもわかる当たり前の理由しかない」ということです。ア：「専門的な理由」→×。イ：「道徳的な理由」→×。

エ：「伝統的な理由」→×。

問 18 「直前の『何がおもしろいのか』を判断したうえで、競技の参加者によって検討した結果、皆で合意した」の部分に着目し、この内容と同義の選択肢を選びます。エ：「何がおもしろいのか」→「スポーツを楽しむ」、「判断したうえで、競技の参加者によって検討した結果、皆で合意した」→「競技者が」創意工夫しながらルールを作り上げてきた」、このように対応します。

問 19 「原則」とは、「書かれていないけれど、前提になつていてること」、「いちいち言う必要がない『当たり前のこと』」です。「ルールは守る」ということも、その「原則」にあたります。そして、実際にプレーしている時に、「勝とうと努力する」ことより、数倍の覚悟が必要」なくらい難しいことは、この「ルールを守る」という「原則（書かれていないが、当たり前のこと）」を守るということなのです。

問 20 「そういう理由」が何を指すかを考えます。まずは、直前から①「それができる」から」となります。これではよくわかりませんので、「それ」の内容を直前に述べられていることを押さえながらまとめ、②「勝つために一所懸命プレーしていると、カツとする」とが当たり前だが、その当たり前のことをしないために『それなりの覚悟』を持てるから」とします。次に、「それなりの覚悟」とは、どういうものなのかを読み取ります。傍線部の前には該当する内容がありませんから、後の段落に着目すると、「その原則を守る覚悟を持たないならば」という表現が見つかります。このことから、「それなりの覚悟」とは、③『ルール』が何故必要かという原則を理解して、その原則を守る覚悟」となります。ところが、実際は「それなりの覚悟」を持ってプレーすることは難しい。そこで、それができる人が尊敬されるわけです。そうした内容を最後の段落に着目してまとめると、④「スポーツの原則を守る覚悟を持ち、ルールに従つて、正々堂々と戦う」という難しいことができるから」、尊敬されるということになります。以上のことから、②をベースにして、③と④を加えてまとめれば完成です。

問 21 23行めに、「スポーツへの参加は強制されるのではなく、自由意思によるもの」とあります。

問 22 13・14行めに、「スポーツは人間が楽しむためのもの」とあります。

問12

ア：「相手を勝たせてあげようと思ふくらいの心の余裕が必要である」→×。
しまらない方がみんなで楽しくプレーすることができる」→×。
工：「肉体的な疲労ですら楽しいものにしよう」と工夫されたルール」→×。